

食の外食化に関する研究(Ⅲ) いわゆるニューファミリーの外食について
 聖徳学園女短大 ○西脇泰子 松永久子 谷田沢典子 草野愛子

目的 総務庁統計局家計調査によると岐阜市の外食費の割合は高い。讀者らは、既に1・2報において外食の一般的状況と学生の外食について報告を行ったが、今回は生活や意識の変化をになう層といわれるニューファミリーを対象に外食実態とそれとのかかわる要因を意識・食生活態度等の側面から追求することを目的とした。

方法 調査対象：岐阜市内の小中学生をもつ母親1057名と高学年の児童627名

調査方法：留置アンケート調査

調査時期：昭和59年12月2日～7日

- 結果 1)主婦の昼食外食は常勤・パートに多く、次いで専業主婦・自営業の順であった。
 2)家族そろっての外食は全体として、職業との強い関連がみられた。とくに外食の頻度によって異なる傾向がみられ、外食頻度月1～2回では専業主婦が、月3～4回以上では有職者が有意に高い傾向を示した。
 3)家族そろっての外食は核大家族にくらべて、核家族の方が高い傾向を示した。
 4)午づくり度は専業主婦に高く、内職者が最も低かった。また、主婦の昼食の自宅外回数の多いほど午づくり度の低い傾向がみられた。
 5)栄養的な配慮によつて3種のパターンを設定し、朝食における選択傾向をみた結果、専業主婦と常勤者の方が栄養的な配慮の傾向においてまさっている傾向が認められた。
 その他 家族類型・意識・子供の食生活などとのかかわりについても分析を行ったので報告する。